

ロールシャッハ・テストの フィードバックに関する研究

——我が国におけるこれまでの研究と今後の課題——

依田 尚也

[キーワード：①ロールシャッハ・テスト ②心理検査 ③フィードバック]

1. はじめに

1. 心理検査の結果をフィードバックすること

心理検査は、テスター（検査施行者）である心理専門職にとって、その実施法や、得られた結果の解釈法を習得する必要があることは言うまでもない。さらに、得られた結果について、検査を受けたクライアントにいかに関与するか、ということも習得していくべき大事な事項である。近年、我が国においては、心理検査で得られた結果をフィードバックする方法論が検討され始めている。例えば、質問紙法による代表的な心理検査の1つであるMMPI（ミネソタ多面人格目録）について、塩谷・石川（1999）はフィードバックマニュアルを作成している。彼らは、「フィードバックとは被検者と解釈者（筆者補足：つまりクライアントとテスター）が検査情報を共有する過程である」という理念のもと、検査結果が載っている「MMPIプロフィール」をクライアントに提示した上で、専門用語でなく平易な言葉を用い、対話をしながらフィードバックを進めていくことを重視した。石川ら（2002）、石川・米山（2003）の調査では、上記マニュアルに従ってフィードバックを行った結果、調査対象者の自己理解が深まったことが示されている。

これらの調査結果が示すように、心理検査のフィードバックは単に検査から得られた結果を伝えるという事務的なものではなく、その方法次第でクライアントの自己理解を促す治療的な力を持つようになると考えられる。Finn & Tonsager (1997) は、心理検査は単なる情報収集のためのツールではなく、テスターとの協働的な関わりを通してクライアントに治療的な効果をもたらしうるものであるとする「治療的アセスメントモデル」(Therapeutic Assessment Model)を提唱している。このモデルでは、クライアントとテスターは検査結果を共に振り返り、クライアントの疑問を反映させながら、その生活上の問題を解く可能性について話し合う。テスターは、検査から得られたスコアの妥当と思われる解釈について、標準化されたデータと研究に基づきながら説明し、クライアントはこれらの仮説が自分自身の体験や理解と「ぴったり(Fit)」するかどうか尋ねられる。そして、このような協働的なやりとりを重ね、クライアントの抱える疑問に対する共同の(joint)「答え」を生み出すことを目指す。最終的に、テスターはクライアントと共に取り組んできた、クライアントの疑問に対する答えを含んだアセスメント結果をフィードバックする(Finn, 2014)。心理専門職となるための専門的な訓練を受けたテスターでなければ、このような協働的なフィードバックのプロセスを実践することは不可能である。心理面接と同様に、フィードバックについても検討、研究を重ね、よりよい実践のあり方を考えることで、その治療的意義はさらに高まり、クライアントの利益に大きく資することになるだろう。にもかかわらず、実際の心理検査場面における手続きややりとり、さらにはフィードバックについて書かれた論文はまだまだ少ないのが現状である(岩野・横山, 2013)。

2. ロールシャッハ・テストの場合

我が国において広く用いられ、一般の知名度ももっとも高いであろう心理検査の1つとして、「ロールシャッハ・テスト」(The Rorschach Test)

が挙げられる。ロールシャッハ・テストは、投映法、つまり非構造的で曖昧な刺激を提示し、それに対するクライアントの反応を分析することによって、クライアント特有のパーソナリティや心理的問題などについて明らかにすることを目指す心理検査の1つである。この方法では、「客観テストの場合のように、目的が明確な刺激状況で意図的な答え方をするようなわけにはいかないため、その人全体として直感的に対応せねばならず、こうしてもっともその人らしい態度や内的世界が表出されることになる（池田, 1995）」と考えられている。本検査では、刺激として「インクプロット（インクのしみでできた模様）」のついた図版10枚が用いられる。その実施において、まずテスターは10枚の図版を一枚ずつクライアントに提示し、それぞれのインクプロットが何に見えるのかを自由に答えてもらう（自由反応段階）。その後、なぜそのように見えたのかをクライアントに質問する（質問段階）。最後に、これらの手続きで得られたクライアントのデータを分析する。高橋（2004）によれば、テスターは「クライアントがどのような気持ちでこの反応を言葉にしたのか、クライアントはいったい何を考え、何を感じ、何を訴えようとして、このように答えたのか」を考え、クライアントの反応を追体験し、反応を共感的に理解しようとする態度を基本とする。そして、この基本的態度を基に、①構造分析（反応を所定の基準でスコアリングして数量的に分析すること）、②内容分析と③系列分析（各図版に対する意味付けや図版間の文脈を質的に分析すること）、④テスト時の行動観察を行う。これらを統合し、さらにクライアントの生活史と関連させて、最終的な解釈を導き出す。

先述の通り、ロールシャッハ・テストは投映法の1つであり、主観的な色合いが強い心理検査である。しかし、心理検査としての客観性、科学性を保つために、その結果の整理や解釈法の検討、客観的なデータの蓄積がこれまで積み重ねられてきた（高橋・北村, 1981など）。こういった研究が積み重ねられている中で、近年はロールシャッハ・テストの結

果の「フィードバックのあり方」についても焦点が当てられるようになった。これは、中村・中村(1999)が、ロールシャッハ・テストの実践において、「クライアントは、自分の検査結果について知る権利を有しているにも関わらず、その結果をフィードバックする方法については真正面から論じられることが少なかった」という臨床的問題に着目したことが契機になったと考えられる。本論では、ロールシャッハ・テストのフィードバックに関するこれまでの研究について振り返り、その成果や課題、今後の展望について考察していくこととしたい。

II. ロールシャッハ・テストのフィードバックについて

1. 包括システムと片口法

ロールシャッハ・テストは、その施行法や、結果の整理、解釈法が数種類あり、我が国におけるその代表的なものとして包括システム(Exner法)と片口法(片口-Klopper法)の2つが挙げられよう。小川(2011)が我が国の心理臨床家を対象に行った、ロールシャッハ・テストの各システムの採用率に関する調査結果では、片口法が64.3%で最も多く、包括システムはそれに次ぐ16.0%であった。

包括システムは、Beck, Herz, Piotrowski, Rapaport & Schafer, Klopperというアメリカにおける5つの主なロールシャッハ・テストの学派について、Exner, J.E.が実証的検討を通してそれぞれのシステムのエッセンスを包括したことにより、1974年に誕生した(高橋, 2004)。誕生後も、その時々の実証的研究に基づき、今日に至るまでにスコアや解釈仮説が変化してきた(高橋, 2004)。テスト間でのスコアリングの一致度を高めていること、つまり一定の訓練さえ受ければ容易にスコアリングでき、一定の水準までの解釈は誰もが同じようにできる、という長所があるとされている(高橋, 2004)。一方で、片口法は我が国において1950年代初頭に、片口安史によって考案された(片口, 1987)。基本的に、

アメリカの主流な学派の1つであったKlopferの記号化システムに基づいているものの、この方法の煩雑さを捨て、適度に簡素化して使いやすい形になっている（小川，2011）。包括システムは、数量的な情報に重きを置き、evidence basedを目指しているのに対し、片口法はnarrative basedであり、クライアントの言語的表現の吟味や力動的理解を大切にしているのが特徴であるとされている（八尋・明翫，2004a／八尋・明翫，2004b）。とはいえ、八尋・明翫（2005）は「データを処理し解釈仮説を抽出してくる経過を見れば、両法共に解釈に当たって、特定の理論を背景にせず過去の量的研究から得られた解釈仮説に則っている点や各種の変数や継列そして言語的表現を重要視している基本姿勢は何ら変わることはない」と述べている。実際、包括システムの場合であっても、数量的分析だけでなく質的な分析も行っているが、実証性を重視するためにそのウエイトの置き方はかなり控え目である（高橋，2004）。

本論ではこれ以上この2つの詳細や相違点について説明する紙面上の余裕がないが、最後に1つ付け加えたい。まず、包括システムでは「構造一覧表」と呼ばれる表に、片口法では「サマリースコアリングテーブル」と呼ばれる表に構造分析の結果がまとめられる。先ほどのMMPIのフィードバックマニュアル（塩谷・石川，1999）に倣えば、ロールシャッハ・テストでも、その結果がまとめられた表を提示しながらフィードバックするのではないかと推測されるが、実際のところはどうかであろうか。以下、紹介していきたい。

2. 包括システムのフィードバック

冒頭でも紹介したように、中村・中村（1999）は、ロールシャッハ・テストにおけるインフォームド・コンセントの問題（検査結果を知る権利を有するクライアントに、いかに検査結果を返すべきか）に着目し、「ロールシャッハ・フィードバック・セッション（Rorschach Feedback Session:以下、RFBS）」を提唱した。この方法は、構造一覧表をテスター

とクライアントの間に置き、それを見ながら話し合い、結果の説明、解釈がクライアントにとって納得できるものであるのかを確かめ合いながら進めていく、という相互的なプロセスを特徴としている。具体的には、表の見方、そしてそこに記載された7つのクラスター（「統制力とストレス耐性」、「感情」、「思考」、「認知の特質とパターン」、「情報処理過程」、「対人知覚と対人関係」、「自己知覚」）の意味を分かりやすく説明する。そして、クライアントのニーズや特性に合わせて、それぞれの数値について説明をしていく（表1）。

表1 RFBSの手続き（橋本・安岡（2012））

	内容	セラピストの働きかけ（例）
ステップ①	ロールシャッハを受けた感想と、フィードバックで知りたいことをクライアントに尋ねる。	「あなたが、とくに自分自身について知りたい点はなんでしょうか？」
ステップ②	ロールシャッハでわかることを説明する。	「人柄や性格、その人の持ち味や短所もある程度示すことができます」
ステップ③	テストの限界について説明する。	「テストという断面でああなたの性格なり人柄を見ているわけで、全体そのものを見ているわけではない」
ステップ④	構造一覧表の提示。	「いろいろと見えたものを教えてくれた結果を、いろいろな記号や数におきかえてそれをまとめたものが、この表なんです」
ステップ⑤	クラスター解釈に従い、各変数の意味について解説する（以下は各クラスターごとの例） ・統制、ストレス耐性、状況関連ストレス ・感情	「EBという比率は、左辺の方が高いのは“考えたり予測を立てたりしてから行動に移すパターン”を示し、右辺の方が高ければ“まずフィーリングに従って行動してみれば楽しければ続けるし、そうでなければ止めるといった試行錯誤型のパターン”を示します」 「感情をどのように扱っているかがわかる数字のまとめです」

・ 対人知覚	「対人関係に敏感で、人との関係にエネルギーをかけ、何か悪いことが起こらないように用心深いところがあります」	
・ 自己知覚	「自分自身についてどのように思っているかが示されている数字です」	
・ 情報処理過程	「あなたがいろいろな情報に接したり、自分から得ようとしたりした際に、それらの情報をご自分のなかでどのように整理し、把握してゆくかということがわかります」	
・ 媒介課程	「とくに感情的になると人と違った判断をしやすいようですね」「怒りがともなうと・・・・・・・・」	
・ 思考	「この部分は思考のまとめりといって、あなたがどのように考えをめぐらせていく人なのかわかります」	
ステップ⑥	自殺指標が高い場合、そのことについて危機介入を行い話し合う。	「今までに死にたいと思ったことはありませんか？」
ステップ⑦	RFBSについての感想をクライアントに尋ねる	

なお、RFBSでは、どのような内容であれ、クライアントの述べた具体的な反応を引用して解釈を伝えること（「×カードで〇〇という反応を出されたことから、これこれこういうことが考えられました」というようなこと）は厳禁とされている（中村・中村，1999）。これは、再検査の際に、クライアントが前回のフィードバック内容を受けて意図的な反応を出してしまう可能性があるためである。

2014年1月現在、RFBSの実践に関する研究で、学術誌に掲載されたものは5本である。以下、刊行された順に紹介していきたい。

まず、佐久間・中野（2004）は、不登校状態にある中学生のクライアントに対して行ったフィードバックの事例を2つ紹介している。彼らは、不登校の事例は「コミュニケーションの取りづらさ」という共通特徴があるゆえに、援助者は心理面接における初期の関わりにおいてその子の内面を知ることが難しいと考えた。そこで、ロールシャッハ・テストを

施行することで、面接のみでは難しい上記事柄について知ることを目指した。その結果、検査とフィードバックの施行によって相互理解が図られ、関係が深まったことが報告された。彼らは、「心理検査の結果は時として面接で得られた意見よりも客観性があり信頼に足ると捉えられるもの」であり、そういった意味でその結果のフィードバックはクライアントに多大な影響をもたらすものであると考察した。

青木（2007）の事例では、長年ひきこもり状態にあった成人男性のクライアントとの心理療法の最中にロールシャッハ・テストを行った。そして、RFBSを参考に、7回もの面接を費やしてフィードバックを行った。具体的には、テスト結果に触発されてクライアントが語った過去のエピソードや現在の思いを聴くことに十分な時間を取り、そこで出てきた話をもとに結果の解釈や今後の方針について話し合った。このようなフィードバックの利点として、「クライアントがより主体的に自分自身を見つめるようになったこと」、「意欲的な行動変化（自分の特性にあったバイト探し）が見られたこと」、「テスト結果について一緒に検討することは、共同作業の雰囲気を出し、それ自体が相互的な対人交流の練習になったこと」の3点が挙げられた。また、「テスト結果のフィードバックの仕方に留意すれば、そこから連想をふくらませ、自分自身についての内省を深めることができる」ことから、フィードバックは「夢について話し合うこと」と類似している、と考えられた。

中村・野田・平木（2010）の事例では、夫婦カウンセリングの中で妻と夫それぞれに対してロールシャッハ・テストを施行し、さらに夫婦同席でRFBSを行った結果、その後夫婦間のコミュニケーションが改善したと報告されている。具体的には、RFBSにおいて「個々のサイコロジーを解釈するのではなくて、2人のサイコロジーの組み合わせ（例えば「夫婦2人ともpassive」など）だとういうことが起きると思うかということ、今までの具体的で日常的なやりとりの例を入れながら進めていく」ことが、自分たち夫婦のことを自覚するチャンスになったのではないか

と考えられた。

塚本・前原・有木（2010）は、精神科病院もしくは開業心理相談施設の外来患者50名に対しRFBSを行った後に質問紙調査を行い、クライアントのアセスメント過程での主観的体験を測定し、RFBSの臨床的意義について検討した。まず、主観的体験については、クライアントは検査場面で緊張を強いられ、伝達される内容が心地の良いものであっても、問題を矮小化することなくむしろ深くまで扱っていると感じられるようなフィードバックを「良かった」と評価することが分かった。RFBSでの解釈は、「クライアント自身も自分について解釈するという参加型の作業」である。つまり、同じ構造一覧表上の数値を基にして話し合うが、検査者は心理学的知見から説明し、クライアントはそれを自らの体験に置き換えて説明する。その中で、クライアントは数値の理解をそれまでの自己理解とは違う視点で改めて捉えなおし、深い理解が生じると考えられた。また、RFBSにおいて、検査者が視覚的な情報を用いて彼らの心理的なリソースや強さを具体的に指摘することが、クライアント自身が持つ肯定的な面を照らし返すことになり、潜在的な能力に対しエンパワーメントすることになると考えられた。彼らは、RFBSにおいて構造一覧表を用いて話し合うことについて、「視覚を用いた方法でもあり、数値に投射することで問題を外在化しやすく、侵襲的にならず安全な環境でそれまで抱えていた問題を話し合う機会を提供する」、「自分のことを語りながらも問題と距離を置いて語ることができ、自己を客観的に捉える視点を与える」、「その後も治療者の助けを借りて問題に取り組んでいく気持ちを高め、治療同盟へとつながりやすい」といった利点を挙げている。このような利点によって、クライアントは自分の問題を自由に語る環境が与えられ、検査者の助けを借りて深い自己理解へとつながると考察された。また、クライアントは検査者の分かりやすい説明を足がかりに、数値と自らの経験をすり合わせる。そして、「だから自分はこうだったんだ」と深く気づき、曖昧漠然としていた自己や自己

の問題がはっきりするプロセスを踏む。これが、RFBSの臨床的意義であると考察された。彼らは、「このようなプロセスは、心理療法への布石となり、その後の治療への動機付けに貢献する」と述べている。

最後に、橋本・安岡(2012)は、引きこもり青年とのRFBSの事例について、質的研究法を用いてクライアントの体験を検討した。その結果から、RFBSにおいて重要なことは、①ロールシャッハの結果についてクライアントの生活も踏まえながら正確に理解すること、②その理解をテスターとクライアントの間で共有しようと努力すること、③その際に知的な理解だけでなく、感情にふれながら探索を進めること、という3点が重要であると考えた。そして、構造一覧表は①のために非常に役に立ち、②のための客観的共有データとしても大きな力を持っているとし、さらに「それだけでは不十分であり、そこで得られた新しい理解やその場で生じた感情をくみ取るという、心理療法としていかに関わるかという部分を大切にしたい③のような働きかけこそが、クライアントにとっては中身の深い充実した体験につながるように思われる」と考察した。

以上の通り、「構造一覧表をテスターとクライアントの間に置く」というRFBSの特徴が、フィードバックにおいて非常に重要な役割を果たしていることが分かる。冒頭で紹介したMMPIのフィードバック(塩谷・石川, 1999)でも同様に、検査結果が載っている「プロフィール表」をフィードバックの根拠として用いている。竹内(2009)は、フィードバックにおける重要なポイントの1つとして「根拠を示すこと」を挙げている。心理検査の種類に関わらず、テスターはその検査結果を「表」にすること、つまり視覚的、客観的な形で根拠を示すことが、クライアントとの間で協働作業を行い、自己理解を促す上で有効であると言えるのではないだろうか。そのプロセスは夢について話し合うことと類似し(青木, 2007)、心理療法的な関わりであり(橋本・安岡, 2012)、言い換えればフィードバックは心理専門職がその専門性を発揮できる重要な専門業務であると主張できよう。

3. 片口法の場合

先述の通り、片口法は包括システムに比べて広く用いられているものの、フィードバックの方法やルールは現在のところ明確に体系化されていない。これは、片口法を開発した片口（1987）自身が「検査結果は、とくに受検者から求められない限り伝えないことを原則とする。しかし、受検者から強い要望があれば、それに応えなければ相手に不安を与えることになるので、検査結果の伝達が必要となる」と述べており、フィードバックに対してあまり積極的な態度でなかったことが一因かもしれない。

片口法によるロールシャッハ・テストのフィードバックに特化して書かれた論文は、筆者が調べた限りでは浦田・津田（2003）のもののみである。彼らは、不登校、引きこもり状態にあった中学生のクライアントとのカウンセリングの中で、クライアントの精神力動を理解するために片口法によるロールシャッハ・テストを施行した。そして、その結果をフィードバックしたところ、クライアントの自己理解が深まっただけでなく、クライアントとのコミュニケーションの契機になったことが報告されている。フィードバックにおける「話し合い」の重要性や治療的意義に言及されている点は、先ほど紹介したRFBSについての論文と同様であると言えるだろう。しかし、浦田・津田（2003）の論文の中では、フィードバックについては、「自殺念慮がある」、「外界の刺激に動揺しやすい」といったことを中心にクライアントに伝えた、という記載しかなかった。RFBSのような具体的な手法、つまり片口法の場合であればサマリースコアリングテーブルを用いていかにフィードバックしたか、ということについては論じられていない。

以上の通り、片口法を用いているロールシャッハ・テスト使用者が、実際のところどのようなフィードバックを実施しているのか、その具体的な実態は論文上では明らかとなっていない。

Ⅲ. 課題点

1. 2つの方法を比較して

これまでの紹介で示された通り、包括システムには「RFBS」という体系化されたフィードバックの方法がある。包括システムそのものが、数量的な情報に重きを置き、evidence basedを目指していること、そして「誰もが同じ手順を踏むことで、ほんの僅かな差異もなくすこと」を目指していることにより（八尋・明翫, 2005）、フィードバックについても手続き等がしっかりと制定され、構造一覧表をもとに実施するというevidence basedな性質を持ったものが誕生したのではないだろうか。誕生後も、その実践に関する研究が複数行われている点からも、RFBSを用いるテスター達がevidenceを積み重ねていこうとする姿勢が表れているように思われる。

一方で、片口法はnarrative basedであり、「解釈仮説の集約の根拠となる変数の取り上げ方は検査者の判断によって若干異なる可能性がある」（八尋・明翫, 2005）、「高度な柔軟性と経験を検査者に求める方法」（明翫・八尋, 2006）であるとされており、テスターの自由度が高い方法である。よって、フィードバックにおいても、テスターが自らの判断で自由に、言い換えれば手さぐり、あるいは試行錯誤的に実施しているところがあるのかもしれない。上芝（2000）は、ロールシャッハ・テスト習得の過程について、①未熟なために個人差あり（教科書での学習が必要な状態）、②教科書的・標準的なやり方（教科書での学習で標準的な方法を習得し、個人差が少なくなる）、③円熟して個性的（既存の解釈仮説に安易に頼らず、自分なりの分析解釈体系を職人芸的に用いるようになる）、という流れを想定している。「②教科書的、標準的なやり方」があるからこそ、経験の少ない初心者は習得に向けて努力し、習得後はそれをベースにして職人芸的な領域へと向かっていくことが可能となる。これは、同検査のフィードバックについても、まったく同じことが言え

るだろう。しかし、これまで紹介してきた通り、片口法は包括システムとは異なり、RFBSのような教科書的、標準的なフィードバック技法が確立されておらず、フィードバックの実践に関する論文も1つのみである。未熟な初心者が、教科書抜きで、手さぐりで職人芸を身につけようとする、という状況が生じかねない。よって、各臨床心理士養成指定大学院における、フィードバックに関する訓練の在り方が、非常に重要であると考えられる。

伊藤・秋谷(1998)は、我が国の大学における心理検査に関する授業の現状について調査を行った。その結果、学部教育においてはロールシャッハ・テストについて取り上げられることが多いこと、その内容は「歴史・概略」、「施行・スコアリング・解釈」、「症例」、「その他」であり、臨床実践において重要な報告書の書き方に関する教育は含まれていないことが示された。これらは学部段階についての調査結果であり、1998年という時点であることからRFBSの誕生前でもある。現在の指定大学院における実態を明らかにすることで、包括システム、片口法双方のフィードバックの訓練について再考する機会になるだろう。

2. インフォームド・コンセントの観点から

岩野・横山(2013)は、心理検査の施行や、そのフィードバック自体が心理療法的な関わりであるのならば、検査施行前に検査そのものについての情報を開示し、それを受けることについてのクライアントの意見を問う、という「インフォームド・コンセント」が重要であると述べている。そして、心理検査におけるインフォームド・コンセント、および検査結果をフィードバックすることの重要性について、我が国は欧米に比べると大きな遅れをとっていると指摘している。Pope(1992)は、①「クライアントは、アセスメントが行われることになった経緯や、どのような手続きがそれに含まれているかということ、そしてどのようなフィードバックを(誰から受けることを)望むことができるか、といったこと

について知る権利を有している」, ②「標準化された検査を含む, 正式な心理アセスメントは, クライアントに対して, 心理療法を受けるかどうか, 受けるのであればどのような種類のものにするかどうか, といったことについて決断をする基となる情報をしばしば提供する」と述べている。つまり, フィードバックにおいてクライアントは「知る権利」を持った主体的な存在であることを主張しており, これはインフォームド・コンセントの概念そのものである(岩野・横山, 2013)。その後, Finn & Tonsager (1997) は, これまで紹介してきた通り, クライアントと対等な体場で話し合い, 検査結果の共有を目指す治療的アセスメントモデルを提唱した。岩野・横山 (2013) は, このモデルは, 検査者と被検査者のヒエラルキーを水平にしていくものであり, その中でクライアントは主体性を回復していくのではないかと述べている。

先述の通り, RFBSを提唱した中村・中村 (1999) は, 当時ロールシャッハ・テストが精神医学的診断や精神鑑定の補助, またはクライアントの無意識を探ることのできる手段としてのみみなされ, 結果の報告書はそのままではとてもクライアントにフィードバックし難い内容であったことを問題視していた。それゆえに, RFBSは検査結果をテスターとクライアントの共有財産とみなし, この財産をクライアントにも理解できるように説明するのがテスターの役目であるとした。そして, 「さらに治療が必要であればどういった治療(われわれよりも効率の良い治療法を提供できる治療者を紹介することもある)がどれくらいの期間にわたって必要なかも検査結果にもとづいて説明する。そのうえで患者の選択を待つ」という, 先ほど紹介したPope (1992)と同様にインフォームド・コンセントの概念を大切にしている。実際, これまでのRFBSの実践について書かれた論文の中では, クライアントは検査結果を「知る権利」を持った主体的な存在であるとみなし, テスターが結果の共有に努めていることが記述されている。先に紹介した包括システムについての論文の中で, 橋本・安岡 (2012) の事例では, 心理相談室でのインテーク後

に、クライアントの精神力動を含めたパーソナリティを把握することを目的にロールシャッハ・テストが施行されている。そして、RFBSを行い、検査結果に基づいてその後の心理療法の治療目標を確認し、契約に至っている。これはまさに、心理療法のインフォームド・コンセントとして検査結果を用いている、貴重な実践の報告であると言えよう。

片口法でのフィードバックに関しては、これまで述べてきた通り浦田・津田（2003）のもの1本のみであり、心理療法開始前ではなく、その最中に検査とフィードバックが施行されている。多くの場合、ロールシャッハ・テストを含めた心理検査一般は、心理療法が始まる前、もしくは開始直後に行う場合の方が多いだろう。片口法の場合、その結果をいかにフィードバックしているかということに加え、後に心理療法に発展する場合はどのようにしてインフォームド・コンセントとして検査結果を用いるのか、その実態を明らかにしていくことが求められよう。

3. 2つの方法の交流について

RFBSという体系化されたフィードバックの方法があることから、包括システムの方が片口法よりもフィードバックの面では使いやすいかもしれない。ここで、明翫・八尋（2009）は、包括システムに片口法の視点を導入することによって、クライアントのパーソナリティの独創性や柔軟性などといったパーソナリティ理解を広げる可能性がある、ということを述べている。例えば、包括システムではデータとして扱わない「反応数」、「反応拒否」、「反応時間」について、数量的データとしてこれらを用いることがなくても、片口法の視点から解釈することで、クライアントの力動を追体験できるかもしれない。RFBSの際に、クライアントに提示した構造一覧表に記載された内容以外の情報についてもテスターが頭に入れておくことで、クライアントの自己理解を促す働きかけの幅がより広がる可能性があるだろう。

RFBSを考案した中村・中村（1999）は、フィードバックの際の「メ

タファ어의使用」や「クライアントに見合った言葉の選択」は、かなりの部分テスターの経験や裁量に依存してしまわざるを得ないことが、この方法の今後の課題であると述べている。例えば、7つのクラスターのうちの1つである「感情」について、RFBSでは「感情をどのように扱っているかがわかる数字のまとめりです」と紹介した上で、感情の表出のされ方、揺さぶられ具合などについて、具体的な例を挙げながら解説し、クライアントの場合はどうであるかを解釈する(中村・中村, 1999)。「クライアントの場合」とあるように、テスターは「生活史や問題歴」といったnarrativeな要素を、evidenceに基づいた数量的結果の解釈と統合させた上で、個々のクライアントに応じたフィードバックをしなければならない。このように、RFBSが寄って立つ包括システムはevidence basedであるとされているが、フィードバックにおいてはnarrativeな部分が非常に重要であると言えるだろう。よって、ウエイトの置き方の差はあるにせよ、クライアントのnarrativeな要素を理解する上で役立つ内容分析や系列分析の結果を、いかにフィードバックに活かしていくか、今後検討を重ねていく必要があるだろう。

IV. 新たに登場したR-PASの可能性

これまで、包括システム、片口法双方のフィードバックについて論じてきた。そして、evidenceに基づいた結果を、narrativeな視点を持ちながら、個々のクライアントに応じてフィードバックすることが重要であると考察された。evidence, narrativeはどちらも有意義なフィードバックの実践において欠かせない要素であり、両方の視点からフィードバックを検討し直すことで、よりよい実践につながると言えるのではないだろうか。

ただ、筆者の経験、実感では、包括システムにおける構造一覧表にせよ、片口法におけるサマリースコアリングテーブルにせよ、記号、数

値がとても多く、決してクライアントにとって視覚的に分かりやすいものではないように思われる。また、高瀬（2013）が述べているように、これらの表は個々のクライアントの相対的位置づけについての情報、つまり「そのスコアが一般的であるのか、それとも逸脱しているのか」という判断がすぐにつかない、という課題点がある。その中で、evidenceの面を改良し、結果の視覚的な提示の在り方に革新性を持たせた「R-PAS(Rorschach Performance Assessment System)」というロールシャッハ・テストの方法が、近年アメリカにおいて開発された。今後、ロールシャッハ・テストのフィードバックのあり方をより良い方向に導く可能性があると思われるので、最後に紹介していきたい。

R-PASが開発された背景には、アメリカにおいてゆるぎない地位を築いていた包括システムに対する種々の批判（①指標のなかには精度があまり高くないものが含まれており、被検査者の問題を重めに見積もる「過剰病理化」の現象が起こりやすい。②規準データの抽出に偏りがあったり、データの一部が重複していたりして、必ずしも規準としての役割を果たしていない。③反応数（R）が各指標の得点に多大な影響を及ぼすという構造的な弱点がある（「R問題」）。④用いられる変数・指標の妥当性が十分に保証されていない。あるいは変数・指標を採用する根拠となったデータを公開しないという点で不透明である。⑤スコアリングの信頼性が低い。⑥対象者の詳細な個人情報や、他の心理テストのデータが得られている場合は、そこにロールシャッハ・テストのデータをつけ加えても、査定の精度が高まるわけではない（増分妥当性の乏しさ）があった（高瀬, 2013）。これらの批判を受けて、包括システムのグループに所属していたMeyer, G.J.らが、実践に活かすことのでき、臨床的な示唆に富み、evidence basedで、論理的にクリアで、ユーザーにとって使いやすい、国際的な視点を持ったロールシャッハのシステムを持つことを目指し、独自のシステムであるR-PASを開発した(Meyer & Viglione, 2011)。

この方法の革新的な点として、「これまで用いられていたロールシャッハ変数の中で特に妥当性の高い変数のみが抽出され、使用するスコアが大幅に削減されたことにより、スコアリングが単純化されたこと」、「検査結果の標準得点化によって、その結果が一般的なものなのか逸脱しているのかが判断できること」、および「投映法に、MMPIのように標準得点のプロフィール表示を導入したこと」などが挙げられる（高瀬, 2013）。これらにより、検査としての信頼性、妥当性を高めただけではなく、フィードバックの側面についてもプラスの効果をもたらしたのではないかと考えられる。変数が少なくなったことにより、膨大な結果の中から何をフィードバックしたらよいか判断するテストの難しさが減ることが予想される。また、プロフィールという形で視覚的に結果が提示されることで、テストとクライアント双方は、クライアントのパーソナリティの諸側面が規準に比べて強い、弱いといった特徴を客観的に把握することが容易となる。双方にとって把握しやすいことによって、結果は「共有財産」として用いやすくなり、その後の協働作業も促されるのではないだろうか。

ただ、R-PASは誕生してからまだ間もなく、我が国での実践の報告は現在のところ見当たらない。当然、フィードバックについても研究対象とはなっていない。今後、テストにとってのフィードバックのしやすさや、クライアント側の分かりやすさ、臨床的意義などについて検討していく必要がある。

V. 最後に

本論では、ロールシャッハ・テストのフィードバックに関するこれまでの研究について振り返り、その成果や課題、今後の展望について論じてきた。ロールシャッハ・テストも、我が国の心理臨床における昨今の evidence based の流れの渦中にあり、その実証性などについて厳しい目

で見られている。また、若い世代の心理専門職の間では、ロールシャッハ・テストの習熟に至る長い道のりへの抵抗とそれに見合う臨床的有効性の不信などもあって、この心理検査自体の未来が見えにくい、という声もある（岸本，2008）。先ほど紹介したR-PASについて、高瀬（2013）は、スコアリングが単純化され、スコアリング学習に費やす膨大な時間や労力を削減できることをメリットとして挙げた上で、「次代を担う若い世代がより効率的にロールシャッハ・テストを学べるようになるならば、それもR-PASの功績の1つに数えられよう」と述べている。依田・田島（2014）は、大学院生と若手臨床心理士によって構成されたフィードバック初心者を対象に、彼らがテスターとして体験しているフィードバックの過程を質的に分析した。その結果、初心者は全員、フィードバック終了後に「本人（クライアント）にとって役に立つような事柄を伝えられなかった」、「単に結果についての情報を伝えるだけで終わってしまった」といった不全感に苛まれていることが明らかとなった。「実施、分析、そしてフィードバックにおいて骨を折るような思いをするのに、結局最後は不全感でいっぱいになってしまう」といった体験を重ねている初心者にとって、R-PASが魅力的に映るのはある意味当然であるとも言えよう。しかし、心理専門職である以上、人間の心の持つ複雑さ、分かりにくさから逃れず、なんといっても畏れる気持ちを忘れてはならない。evidenceはevidenceとして用いつつ、クライアントの個性性、独自性に応じたフィードバックを実践していくために、これからも心理専門職は苦闘を続けていかなければならないだろう。

引用文献

- 青木聡（2007）. ロールシャッハ・テスト結果のフィードバックが転機となった一事例. 大正大学カウンセリング研究所紀要, No.30, 4-14.
- Finn, S. E. (2014). About Therapeutic Assessment. Therapeutic Assessment ; resources for clinicians, researchers, and clients. <http://www.therapeuticassessment.com/about.html> (2014年3月24日取得)

- Finn, S. E., & Tonsager, M. E. (1997). Information-gathering and therapeutic model of assessment: Complementary paradigms. *Psychological Assessment*, 9 (4), 374-385.
- 橋本忠行・安岡譽 (2012). ひきこもり青年とのロールシャッハ・フィードバック・セッション. *心理臨床学研究*, 30, 205-216.
- 池田豊應 (1995). 投映法とは. 池田豊應 (編). *臨床投映法入門*. ナカニシヤ出版, pp. 9-16.
- 石川健介・山上史野・松本圭・北村由希・塩谷亨(2002). 心理検査の適切なフィードバックがもたらす効果—MMPIを用いて. *日本心理学会第66回大会発表論文集*, 281.
- 石川健介・米山直樹 (2003). 教師および大学院生に対する心理検査のフィードバック—MMPIを用いて. *日本心理学会第67回大会発表論文集*, 78.
- 伊藤宗親・秋谷たつ子(1998). 大学における心理検査教育の現状—ロールシャッハ・テストを中心に. *ロールシャッハ法研究*, 1, 72-79.
- 岩野香織・横山恭子 (2013). 心理検査の結果をフィードバックすることの意義—インフォームド・コンセントの観点から. *上智大学心理学年報*, No.37, 25-35.
- 片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法. 金子書房.
- 岸本寛史 (2008). 投映法とナラティブ. *ロールシャッハ法研究*, 12, 51-58.
- Meyer, G.J., & Viglione, D.J. (2011). New developments in Rorschach-Based Behavioral Assessment. 2011 annual convention of American Psychological Association. [http://www.r-pas.org/Docs/Meyer_Viglione_\(2011\)_New_Developments.pdf](http://www.r-pas.org/Docs/Meyer_Viglione_(2011)_New_Developments.pdf) (2014年2月16日取得)
- 明翫光宜・八尋華那雄 (2009). ロールシャッハ・スコアリングシステムの交流 (1) Exner法に片口法の視点を導入することの意義. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 9 (1), 37-44.
- 明翫光宜・八尋華那雄 (2006). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (3-2) 片口法の整理・集計・解釈準備段階について. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 5 (2), 35-45.
- 中村紀子・中村伸一 (1999). ロールシャッハ・フィードバック・セッション (Rorschach Feedback Session:RFBS)の方法と効用. *精神療法*, 25, 31-38.
- 中村伸一・野田昌道・平木典子 (2010). [包括システムによる日本ロールシャッハ学会]第15回大会事例検討会記録 夫婦療法の中でロールシャッハ・フィードバック・セッションを行った事例. *包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌*, 14, 18-38.
- 小川俊樹 (2011). 国際ロールシャッハ及び投映法学会第20回日本大会基調講演 日本のロールシャッハ法. *ロールシャッハ法研究*, 15, 10-19.

- Pope, K. S. (1992). Responsibilities in Providing Psychological Test Feedback to Clients. *Psychological Assessment*, 4 (3), 268-271.
- 佐久間恵・中野明徳 (2004). 心理検査を活用した援助方針の検討—不登校事例に実施したロールシャッハ・テストを中心に. *福島大学教育実践研究紀要*, 第46号, 17-24.
- 塩谷亨・石川健介 (1999). MMPIのフィードバックマニュアルの紹介—金沢工業大学の例. *MMPI研究・臨床情報交換誌*, No.8, 321-342.
- 高橋雅春 (2004). 投影法とともに歩んで. *ロールシャッハ法研究*, 8, 83-95.
- 高橋雅春・北村依子(1981). *ライブラリ心理学=11 ロールシャッハ診断法 I*. サイエンス社.
- 高瀬由嗣 (2013). 第3章 ロールシャッハ・テスト. 八尋華那雄 (監修)・高瀬由嗣・明翫光宜 (編). *臨床心理学の実践—アセスメント・支援・研究*. 金子書房, pp.49-75.
- 竹内健児 (2009). 事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方. 金剛出版.
- 塚本優子・前原寛子・有木永子・中村紀子(2010). 外来患者に対するロールシャッハ・フィードバック・セッション(RFBS)の臨床的意義. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 14, 39-52.
- 上芝功博 (2000). 1章 ロールシャッハ法. 氏原寛・成田善弘 (編). *臨床心理学② 診断と見立て [心理アセスメント]*. 培風館, pp.134-141.
- 浦田英範・津田彰(2003). 不登校生徒のロールシャッハ法—治療的介入として. *久留米大学心理学研究*, 第2号, 107-114.
- 八尋華那雄・明翫光宜 (2005). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (3-1) Exner法の特殊スコアと整理・集計・解釈準備段階について. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 5 (1), 19-36.
- 八尋華那雄・明翫光宜 (2004a). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (1) 施行法と反応領域・発達水準などの記号化について. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 4 (1), 27-34.
- 八尋華那雄・明翫光宜 (2004b). ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法とExner法の比較 (2) 反応決定因・形態水準評定・反応内容・平凡反応について. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 4 (1), 35-44.
- 依田尚也・田島耕一郎 (2014). 初心者にとっての心理検査フィードバックの過程について. *臨床心理学*, 14 (4), 557-562.

Review on the studies for feedback of Rorschach test in Japan

YODA, Naoya

The purpose of the present study is to look back on past studies about feedback of Rorschach test in Japan and to prospect the future issues. The Rorschach test is one of the psychological examinations which is used widely, and well known in Japanese professional psychologists. This examination has two different codes called “a comprehensive system” and “a Kataguchi method”. A comprehensive system is evidenced based with quantitative information. In contrast, a Kataguchi method is “narrative based” and respects on the examination of the linguistic representation and the psychodynamic understanding of the client.

In the comprehensive system, a method of the feedback called “RFBS (Rorschach feedback session)” is developed. In this method, testers show the table of Rorschach variables to clients to make sure understanding the interpretation. On the one hand, studies on RFBS have been piled up, which suggests that the procedure of RFBS is effective to form collaboration between clients and testers and to facilitate client’s self-understanding. So, it is considered that the Rorschach variables work like dream materials in psychoanalysis and which seems to have psychotherapeutic structures in RFBS. On the other hand, in a Kataguchi method, the way of the feedback has not systematized so far. And there is very little number of the studies on feedback itself. About the actual situation of the feedback and the way of training of this method, it is shown in future that it is necessary to clarify them. In this way, it is thought that it may be easy to use a comprehensive system with the aspect of the feedback than a Kataguchi method. However, even the testers in Kataguchi method are asked to integrate narrative elements in his life history with Rorschach’s variables in the feedback to serve for individual client. It is concluded that the narrative viewpoint should be respected like a Kataguchi method to develop the more effective feedback.

Finally, R-PAS, the recently developed Rorschach test system in the United States, is introduced as the innovative system that can facilitate the psychothera-

peutic collaboration between testers and clients. However, there are few practical reports on R-PAS in Japan, because it is not yet translated in Japanese. To the conclusion, it is suggested that it is necessary to estimate the psychotherapeutic significance of R-PAS with examining how easy it is to make feedback session within and how easy do clients understand the R-PAS feedback.

(心理学専攻 博士後期課程 3年)

